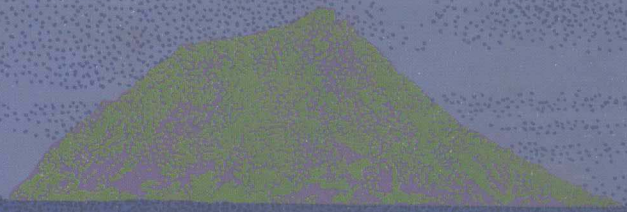
流人

るにん

真木洋三



文藝春秋

流人（るにん）

真木洋三

文藝春秋

真木洋三（まき・ようぞう）
1926（大正15）年、福岡県に生れる。47年気象大学校を卒業後，1年間気象台に勤務。51年九大経済学部を卒業，同年読売新聞社に入社。社会部記者を経て福岡放送営業部長として出向のあと読売新聞社に復帰し，81年退社。　著書に「小説銀行管理」「出向を命ず」など多数。

流人（るにん）

昭和五十八年十月一日　第一刷

定価　一、二〇〇円

著者　真木洋三

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話（〇三）二六五・一二一一

印刷　凸版印刷

製本所　加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Yozo Maki 1983　Printed in Japan

流

人

装幀　坂田政則

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

序章

一

八丈島で五十三年間に及ぶ流人生活を送った近藤富蔵が、帆船の長戸路一号で東京に向かったのは、明治十三年十月二十日であった。

八丈島は、関ヶ原の合戦で石田三成側の西軍の大名だった宇喜多秀家が、徳川家康側の東軍に破れ、父子三人家来十人とともに、慶長十一年に流罪となって以来、流刑の島となった。徳川時代と明治初年にかけて、人殺し、付け火などの重罪で八丈島へ送られた流人は、千七百五十九人を数えた。このうち、百姓、町人、無宿者が千人近くを占めたが、近藤富蔵は、幕府直参の旗本近藤重蔵の総領でありながら、流人となる数奇な運命を背負っていた。

明治新政府の発足とともに、大量の赦免があり、当然、富蔵も明治初年に赦免となるはずであったが、彼だけは赦免が大幅に遅れた。八丈島の管轄が、相模県、韮山県、足柄県、静岡県を経て、明治十一年一月に太政官の布告で東京府に編入されるまで、転々とかわっている間に、赦免の手続きに手違いがあったためとみられる。

東京へ向かう日が遅れたかわりに、富蔵は大きな幸運をつかんでいた。東京府の役人が彼が数えの四十二歳の頃から孜々(ししし)として書き続けた八丈実記の価値を認め、整理して献納するよう命じ、

真新しい筆や紙を支給してくれたからである。膨大な著述が、人目にふれずに反古になってしまうかもしれない不安を彼は抱き続けていた。それが役人の眼にとまったのだから、その喜びはたとえようもなかった。

八丈実記には、島のおもだった公文書、検地の模様、地図の収録、島の神道、仏教、教育の実態、風物や特産物、さらに配流者の綿密な記録などが多岐にわたって毛筆で記されている。さらに聞斎と号していた彼は、聞斎見聞家系私話の項で、藤原鎌足を先祖とする近藤家の由緒のある家柄でありながら、なぜ、八丈島に流罪となって家系に傷をつけてしまったかなど、一身上のことも書きとめた。数十巻にまとめて提出すると、その主要部分の献納がきまり、二十七円が支給された。

島で彼は、仏具の修理や仏像を彫った謝礼として細々ながら食べる糧を得てはいた。一時は、夕学館という学校の督学師としてわずかばかりの物品の謝礼をもらい、先生と呼ばれる身ではあった。それがいま、二十七円の報酬をもらって大先生に一挙に昇格したのである。その喜びに加え、明治十三年二月二十七日付で、大警視大山巌の印のある赦免状が届き、大手を振って帰国できる身となった。

富蔵が乗船して東京に向かった長戸路一号は、本土と八丈島を往復して物資を運ぶ船で、船倉の一隅が彼ら一族に与えられた。

富蔵は七十六歳に達していた。六尺の長身の背は幾分丸まって、頭髪や顎鬚は白く、顔じゅう皺だらけの爺(じじい)であった。頬骨が突き出たいかつい顔に顎は反(そ)り気味で、若い頃は、蝦夷地の巡検で天下に勇名を馳せた父重蔵によく似た魁偉な容貌の持ち主だったに違いない。

島民は、長戸路一号に乗った富蔵に尊敬の視線を送った。奥山、菊池、浅沼、長戸路といった

島の旧家の人たちも出帆を見送りにきた。なかには、近藤富蔵先生万歳と書いた幟を持った人もいた。

富蔵とともに晴れがましい旅立ちを喜んでいるのは、次女の千代野であった。千代野の夫の持丸利三郎も見送りに来ていた。利三郎は島にとどまって農業を続けるが、二人のあいだの娘利千は、東京に連れて行くことになった。

利千は七歳で、船に乗りこむとすぐ、もの珍しさの方が先に立って、艫から舳先まで駈けたり、船倉をのぞいたりで、活発な動きをやめなかった。

「じっとしていなさい」

千代野は利千を叱ったが、利千は、帆を張る作業に気をとられ、見送り人のなかの父が、盛んに手を振っているのに気付かなかった。

富蔵と千代野は島の人たちに手を振り続けた。

船は滑るように港を離れた。旧家の人たちをはじめ、見送り人の一人一人の顔がしだいに遠ざかり、誰が誰だかわからなくなってきた。

富蔵は目頭にたまった涙を拭った。五十三年間の島での生活に、いま、別れを告げる時がきた。辛くて長い流人生活であった。時には楽しいこともあった。しかしほとんど毎日のように江戸へ、そして東京へ帰りたいと願い続けた。いま念願がかなって東京へ帰れるのである。万感がこもごも一度に押し寄せ、胸のなかを熱い塊が突き上げてきた。

八丈富士と三原山の二つの山を見渡せる頃には、人影はひとつも見えなくなり、無人島ではないかとさえ思えてくる。二つの山のあいだのなだらかな丘陵地帯で暮らしたのが、夢か幻の世界のできごとのようである。

老人は、艫にたたずんだまま、海に浮かんでいる感じの島を食い入るように見つめた。
帆を打つ風の音にまじって、潮騒が耳に満ちた。海の香が鼻に心地よい。飛沫が頬に当たった。
富蔵はふと、妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五で、俗にいう観音経の偈（詩）の一部を口ずさんだ。仏教の信仰に篤い彼は、ことあるごとに普門品を念誦し、その全文は彼の脳裏に刻みこまれていた。
――妙音観世音　梵音海潮音
この海潮の妙音はなんという清らかさか。
八丈富士の裾野は、絶壁に近い岩となり、波が岩に当たって、細い白線となっている。
眼を細めて見ている富蔵に、千代野は、
「母上のを、持って参りました」
と、胸にしまっていた位牌を取り出しながら言った。位牌には寿誉還光信女と記されていた。
富蔵は、位牌に合掌し、
「苦労をかけたな。逸には……」
ふるえを帯びた声で言って、逸が眠っている八丈富士の麓の方へ手を合わせた。
流人たちは、春秋に二度、江戸からの島送りの船で八丈島に着くと、彼らを引き受けてくれる村をきめる村割りの籤がひかれたのち、渡世は勝手次第、と言い渡される。間口二間、奥行き九尺の雨露をしのぐだけの粗末な屋形で寝起きはできるが、腕に職があればその職を生かすなりして、各自で生きて行く糧を得なければならなかった。富蔵は三根村に割り当てられた。彼は六尺の偉丈夫で腕力だけは人一倍強かったものの、これといった仕事ができるわけではない。怪力にものをいわせ、旧家の服部家の石垣をつくる力仕事に従事したり、力持ちの割には手先が器用な

ことから旧家の仏具の修理をしたりして、細々ながら日々の糧を得ていたが、八丈実記の著述にとりかかってからは貧困をきわめるようになった。島の特産物の織物である黄八丈を織って、富蔵や子供たちの旺盛な食欲を支えてやったのは、水汲み女の逸であった。

八丈島は、情け島とも呼ばれ、島民の流人たちに対する感情は決して冷たいものではなく、流人が島の女と同棲し子を産ませるのも暗黙のうちに許されていた。流人と内縁の関係を結んだ女は、遠くの湧き水の所まで水汲みに行って食事の支度をしたため、水汲み女と呼ばれるようになった。しかし格式のうえで島民の女房より低くみられていた。

富蔵と逸が知りあったのは、富蔵が島に着いた翌年である。夏の盂蘭盆会で、昼は牛角力、夜は盆踊りがあり、島の老若男女は、浮き浮きしたときを過ごす。富蔵も牛角力の見物に出かけた。

擂鉢状の凹んだところで二頭の牛が角と頭をぶっつけあう牛角力は、島に伝わる行事で角突きとも呼ばれていた。鼻取りという若者が牛の鼻につけた綱を握り、牛をけしかけると、二頭の牛は角と頭で押しまくる。どちらかの牛が押しつぶされるか、逃げるかした方が負けである。巨体にものをいわせて牛が闘争心をむき出しにするたびに、富蔵は興奮して手に汗を握り、それっ、突け、と声援を送っていた。

島の若い女たちも流人と一緒に牛角力を見た。彼女らは、新人好みといって、新顔の流人たちにはとくに好奇心を働かせていた。なかでも富蔵は武家の出として若い島の女たちの関心を集めていた。そんな女性たちのなかで、逸は、積極的に富蔵に近づいた。

富蔵のすぐそばで逸は牛角力を一緒に見物し、どちらからともなく話しあうようになった。青年らしい純なところのある彼に逸の心は引き寄せられたし、富蔵も南国育ちの明るさに魅力を感じてその夜の盆踊りをともに踊った。物腰のやわらかさのなかにも芯の強さがあり、ただの島の

女ではなさそうで、富蔵が問い詰めると、大賀郷村の百姓沖山栄右衛門の長女だと言ったあと、先祖は宇喜多秀家一族なのを打ちあけた。幕府の監視が厳しく、宇喜多家の一族やその家来たちは、浮田とか喜多とかに改姓していた。沖山家もその一党であった。

沖山家はさほど広くはない田畑を耕す百姓に過ぎなかったが、宇喜多家の流れをくむ誇りがあったし、家族のあいだにかよう愛情もこまやかなものがあった。富蔵の方は、幼少時代に父が蝦夷地の巡検などで家庭をかえりみないうえに、母親が離縁となって、母の愛情をまったく知らなかった。逸と知りあい、沖山家に出入りするようになって、はじめて家族ぐるみのもてなしをうけ、逸の愛情にも接しられて、富蔵の心は、しだいにほぐれていった。

富蔵と逸のあいだに、長女操（みさお）、長男弁太、次女千代野の三人が生まれた。流人の身で三人の子女を育てるのは苦しく、口減らしのためもあって、弁太は十二歳で江戸へ奉公に出すことになった。江戸へ出て世間の荒波にもまれ、ゆくゆくは没落した旗本近藤家を再興してほしい、と富蔵は弁太に大きな期待を持っていた。ところが、弁太は船中で病気になり、江戸へ着かぬうちに大島で死んでしまった。

富蔵の悲しみは幾日も続き、放心したような日々のあと、彼はようやく八丈島でしか生きられないわが身を深く見つめ直したすえ、八丈実記の著作にとりかかったのである。

長女の操は、弘化四年に赦免となって東京の下谷山伏町で米穀商をしている加藤仁兵衛を頼り、明治三年に上京した。仁兵衛は、火消役同心で、無実の罪で八丈島に流罪となり、富蔵と親しかった。操はその仁兵衛の世話でいまは片岡吉助と暮らしている。

富蔵、千代野、利千の三人の落ち着き先は、京橋区築地船松町の操宅である。操宅には、千代野が先夫とのあいだにもうけた近蔵もいた。近蔵は十二歳で、ちょうど弁太が亡くなった年頃に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

達していた。近蔵は築地にある八丈島会所に奉公している。富蔵は孫の近蔵の成長ぶりを見るのも愉しみだった。千代野にとって、東京に行くのは、もうひとりの息子近蔵に会える喜びもあった。

千代野は、富蔵の後に立って、お椀を伏せたように小さく見える八丈島を見つめた。島のまわりには水平線しか見えない。空と海がかすかな一線となっている北の彼方に、目指す東京があると思っただけで、心が浮き立ってくる。ただ、母だけを島に残してきたのが不憫に思えてならない。

「母上もご一緒なら、よかったのに……」

千代野は沈んだ声で言って船倉へ消えた。

逸がもう少し長生きしていれば、赦免と八丈実記の献納という二重の喜びをわかちあえたのに、と五年余り前に亡くなった逸の冥福を祈って、富蔵はもう一度、島に合掌した。

二

長戸路一号が大きく揺らぎ始めた。

周囲には島影ひとつ見当たらない。厚い雲がいつの間にか空一面を掩(おお)っていた。突風が吹きつけ、大波が牙(きば)をむいて船を襲った。

船を扱い慣れている船頭も、突然の強風に驚き、船倉の積荷が動かないように、厳重に幾重もの縄をかけて柱にくくりつけた。

千代野はもともと内臓が弱いせいもあって、胃のなかのものを全部吐いた。顔は、血の気が引いて真っ青である。生きた心地がしないのか、積荷にかけた縄を握りしめ、うな垂れたままだっ

た。髪をふり乱し、地獄に落ちる恐怖感で唇をふるわせ続けた。
飛沫が船倉に飛び込んできた。三人の衣類はぐしょ濡れになった。
利千が毬みたいに転げまわった。板壁に頭をぶっつける危険があった。老人は利千をしっかりと抱きとめた。千代野が、胃のなかにはもうなにもないはずなのに、吐きたがって身をもだえると、富蔵は利千を右手に抱き、左手で千代野の背をさすってやった。
千代野は、青ざめた顔で富蔵にしがみつき、
「黒瀬川、こわい！」
とぎれとぎれの声をあげた。
黒瀬川は、八丈島と御蔵島の間の黒潮の流れの早いところである。流人たちのなかには、抜け舟といって、生命がけで島から脱出しようとする者があった。漁船を盗み、本土をめざして漕ぎ出すのだが、船ごと黒瀬川の急流に呑まれた例が多く、余程の漕ぎ手でないと黒瀬川の難関を突破できないのを島民は熟知していた。
いま、富蔵は、弘化二年六月、三根村預かりだった新吉原の遊女豊菊の抜け舟事件をはっきり思い出した。
豊菊は、付火の罪で、富蔵より六年前の文政四年に八丈島に流されていた。島に着いたとき、十五歳の若さだった彼女の小屋には、多くの流人たちが出入りし、吉原での生活の名残りもあって、島では評判の女となり、女王然と振舞った。ところが、文政十一年に、彼女と同じ吉原の遊女で、彼女とまったく同じ年の十五歳で放火の罪で流罪人となった花鳥が、同じ三根村預かりとなった。ことごとに二人は張りあった。しかし女王の座は少しずつ豊菊から若い花鳥へと移った。
花鳥には、頭もよく、博徒で、新内がうまい佐原の喜三郎がついた。喜三郎は花鳥の参謀格と

なって、屈強の流人五人を集めてひそかに脱島の計画を練った。

天保九年七月三日未明、一行七人は、三根村神湊から漁船を盗んで抜け舟を決行した。南風にめぐまれ、腕のいい漕ぎ手をそろえたせいもあって、黒瀬川の難関を突破したらしいとの噂が島じゅうに広がった。

豊菊は、花鳥の島抜けに刺戟され、自分も島を抜け出そうとあせり始めた。めぼしい男を物色するうちに、天保十四年に女犯の罪で島に着いた浅草山谷町宗林寺の僧の宝禅を参謀格とすることにした。旗本の小普請組坂本茂之助の弟で賭博の罪で宝禅の翌年に島に着いた坂本茂三郎も仲間に引き入れた。さいころ遊びのかたわら、五人の男を加える計画が進み、あとは、花鳥一行のように、海のおだやかな日を選ぶだけとなった。

弘化二年六月十一日朝、富蔵は、抜け舟の知らせで、次女の千代野の手を引き、操や弁太も連れて神湊まで駈けつけた。豊菊らは、三根村の漁師重助の舟を盗み、沖へ漕ぎ出していて、舟の姿は見えない。

「黒瀬川を乗り切れるかな」

富蔵はそう呟いて、沖に眼を向けた。

組頭の善右衛門が漁師数人と鉄砲人夫三人を引きつれ、豊菊らの舟を追った。

豊菊らの舟は、昼前に早くも黒潮の急流に阻まれて、逆に島に向かって流され始めた。善右衛門らの舟は豊菊らを見つけると、すぐ近くまで迫った。豊菊らは艪を振り上げて抵抗した。鉄砲を持った三人が流人たちを狙い、なおも抵抗する男たちに発砲した。弾丸は坂本茂三郎ら三人に命中して、海に転落、行方不明となった。舟に残った豊菊、宝禅ら四人は捕えられた。男たちは痛め吟味で次々に死んだ。首謀の豊菊は、六月二十二日、稲葉の刑場で銃殺刑となった。

黄八丈を着て、薄化粧をし、四十女のなまめかしさのなかに鬼気をただよわせた豊菊は、
「早く撃て！　死んだら、虫になって、作物を荒らしてやる！」
と絶叫した。不思議に、その年、害虫がはびこって、島民を悩ましたため、お豊虫と害虫を呼ぶようになった。
千代野は幼かったが、豊菊が潮流に阻まれ、抜け舟に失敗して銃殺されたのだけは、鮮明に覚えていた。いま、千代野は、その恐ろしい急流にさしかかったのだ、と早合点し、恐怖感で体をふるわせ続けた。
富蔵は、黒瀬川はとっくに渡り終えて、いまは三宅島に近づきつつあると思った。
「大風だ。運が悪い」
老人は独り言を言った。五十三年ぶりに、いまは東京と名を改めた出生の地に帰ろうとする矢先、大風に遭うとは、余程、悪運の星のもとに生まれたとみえる。いや、神仏は、信仰心がまだ薄いとみて、さらに罰をこの身に加えようというのか。
富蔵は、船が大きく傾くたびに荷縄にしがみつき、千代野と利千をかばって足を踏んばった。利千が富蔵の手から飛び出して転げた。
「利千！　こっちへ来い」
両手をひろげた懐へ利千が転げこむと、帯を解いて利千をしばり自分の体にくくりつけた。飛沫をあびて老人の顔も頭もぐしょ濡れになった。冷たい海水が手足の感覚を奪い始めた。
ぎ、ぎっ、と軋(きし)む音とともに大波の頂上に船が持ち上げられては、ずしん、と波の底に落ちる、耳を掩うほどの衝撃音が満ちた。その度に奈落の底に吸いこまれるのか、と老人は恐怖感で眼をあけてはおれなかった。

彼の耳は少し遠くなりかけていたが、それでも、

「帆柱が……」

船頭が叫んだ声を、ごおっと走り抜けた風の音の合間に聞いた。帆柱が折れたらしい。船倉が水浸しになり始めた。

千代野は死人にひとしかった。眼を閉じ、うなだれたままである。利千の濡れた頬が老人の髭もじゃの頬に当たった。

「おっかない」

利千の泣き声は暴風にかき消された。利千をかばうため、老人は、ありったけの力をふりしぼって身を支えた。

縄が切れ、船荷のひとつが転がって、三人に襲いかかった。

「なにっ、これしきのことで」

両手で荷物を押し返す老人の腕力は、服部屋敷で石垣をつくったお礼に、米俵二俵をもらい、両腕に一俵ずつ持って帰ったときほどの強さはなかったものの、転がる荷物から身をまもる力は残っていた。

暴風雨と大波は執拗なまでに船を翻弄した。

富蔵は利千を帯で腹に抱きつけたまま、転がる荷物を柱にしばりつけ終わると、体じゅうの力が一時に抜けて千代野の横に尻をついて蹲(うずく)まった。激しい揺れに身を任せているうちに、どう足掻(あが)いたところで、なるようにしかならない、と半ば諦めの境地になってきた。

東京へ着かないうちに、船もろとも沈んでしまうのがなんとも口惜しい。船と一緒に沈むとして、木片や柱は浮くこともあり得るだろうから、利千は柱にしばりつけておいた方がいい。そう

思い直して、帯をとき、利千を柱にしばりつけた。利千は、泣き声も枯れ、濡れ鼠で、紫色になった唇をふるわせ続けていた。

老人は船出のとき、ふと口を衝いて出た観音経をいつの間にか唱えはじめていた。

観世音菩薩は難に遭った人を救ってくださる。海底に一族三人をひと呑みするむごさだけは、避けてくださるであろう。

観音経を百回、念じよう。百回念ずる願をかければ、観世音菩薩はきっと助けてくださるに違いない。

老人は、両腕にありったけの力をこめて合掌し、声をふりしぼって唱えた。

——或漂流巨海　竜魚諸鬼難　念彼観音力　波浪不能没

（巨海に漂流して竜魚など怪物の鬼難に遭遇しても、彼の観音の力を念ずれば、波浪に没することはない）

船倉じゅうに声が満ちて、意外な力が体じゅうに張りつめてくるようである。冷たい潮水で下半身は洗われ、手足に震えが走り、感覚が麻痺して行くが、ここで挫けてはならない。老人は一心不乱に念じた。

——雲雷鼓掣電　降雹澍大雨　念彼観音力　応時得消散

（雷が鳴り、大雨が降りしきろうとも、観音を念じさえすれば、すぐにも鎮まるであろう）

しかし、暴風雨は鎮まりはしなかった。天は近藤家そのものを呪うかのように、老人と千代野、利千を痛め続けた。

一人息子の弁太も江戸へ奉公に行く船旅の途中で病を得て死んだ。弁太に近藤家の再興を託したかった夢すら天は打ち砕いた。やはり、わが家系は呪われている。島で仏を信じ、蚊や虱すら

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook